『否塞録』について

郷土資料整理ボランティアグループ

郷土資料整理ボランティアグループでは、主に茨城県立図書館が所蔵する古文書のうち、メンバーの興味に応じて選んだものを翻刻（ほんこく）し読み下し、それを冊子体にして図書館の図書として所蔵する、あるいは図書館のデジタルライブラリ上で公開して、古文書に関心を有する人に提供しています。ウェブ上ではデジタルライブラリの
http://www.lib.pref.ibaraki.jp/guide/shiryou/digital_lib/kyoudovolunteer/kyodovora_kaidoku_top.html
でご覧になれます。また、このページの書籍名をクリックすれば、図書情報にもアクセスできます。

「翻刻」は、古文書の判読が難しい書体を現代の文字に置き換える作業です。また「読み下し」は、漢文を訓読したときのように、日本語の語法に従って文章を書きだしたものです。

どちらにせよ、必ずしも現代語に「翻訳」したものではありません。翻刻や読み下しでは、文書の全体の流れや書かれた背景などから正しい意味を推察しつつ現代の文字に直します。さらに翻訳にいたる過程で翻訳者の独自の解釈が必要となり、その結果翻訳者によって異なる翻訳ができることになります。

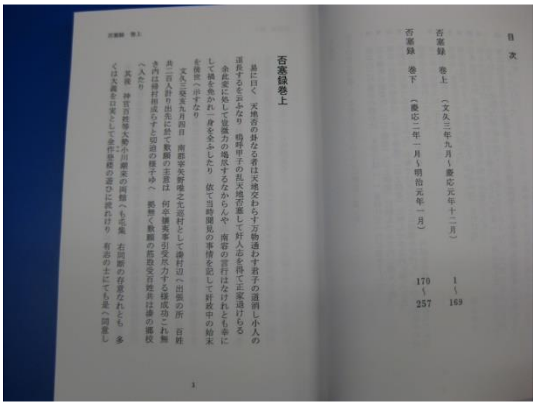
また、いわゆる古文書ファンは、翻刻・読み下しの段階で内容をほぼ理解できてしまい、その道の学者ででもない限り、解釈の微妙な違いまでを吟味する必要を感じないのでしょう。そのため、私たちが行うのは翻刻あるいは読み下しまでにとどめ翻訳には至っていません。

しかし、それでは古文書ファン以外の方には壁が高く、親しみをもっていただくことは難しいでしょう。そこで、茨城県や水戸市の歴史を叙述するどのような書き物が残されているのかを古文書ファン以外の方にも興味をもっていただけないかと考えました。、

『否塞録』は、明治維新前後の水戸藩における天狗党（尊王攘夷派）と諸生派（保守・門閥派）との抗争、藩内諸事の処置、幕府による統制等を日録のように振り返ったもので、幕末水戸藩党争の苛烈な渦中に身を置き明治まで生き残った水戸藩士の貴重な証言記録です。なお、諸生派は、藩校・弘道館の諸生（書生）が多かったためこの名があると言われています。

執筆は文久三（1863）年から明治元（1868）年、明治維新をまたいだ4年半です。記録の最後は「筆を投する時は明治元年辰の正月なり」となっていますが、明治と年号が改まったのは9月8日ですから、実際に「筆を投した」のはその後だと思われます。

その叙述は実に生々しく、たとえば元治元年6月4日には次のような記載があります。江戸の水戸藩邸付近におきた騒乱の様子です。



同四日　監察生熊治衛門　今井新平　岡部城之介先手物頭へ除かれ　大井介衛門（先手より）楠悌之介（使番より）監察となり　肥田新八郎小柳津太郎八（馬廻組頭より）小十人目付組頭となり　鈴木茂衛門　加藤孫三郎　野村喜左衛門（三人は大発の奸人なり）小十人目付となり　高倉平三郎　高根秀三郎奥右筆となり　佐々木雲八郎　渡井伊介小監となる　望月四郎太夫（寄合指引より）側用人となり　亀井津衛門（書記頭取より）勘定奉行となる　右の通り要路へは追々奸人出現し邸中破壊の勢なり　去りなから政府にては鈴木縫殿　岡部忠蔵　原田誠之介等を始め　正論の士未た残り居れは　定て力を竭し拒きたるなるへし　然れとも奸人は破竹の勢を増し　これに加え恐れなから君公も姦説を信し玉ふゆへ邸中僅かの有志の微力にては所詮敵しかたく　遂に要路へ奸人出現したるなり　小柳津肥田は正儀を執て引込たるゆへ遂に外補となる

（同四日付けで、監察・生熊治衛門、今井新平、岡部城之介は先手（さきて）物頭に降格させ、先手・大井介衛門、使番・楠悌之介を監察に昇格、また、馬廻組頭・肥田新八郎、小柳津太郎八を小十人目付組頭に、鈴木茂衛門、加藤孫三郎、野村喜左衛門（これら三人は水戸を奪還すべく江戸を出発した諸生派）を小十人目付に、高倉平三郎、高根秀三郎を調査係に、そして佐々木雲八郎、渡井伊介を小監とした。さらに、寄合指引であった望月四郎太夫が側用人、書記頭取であった亀井津衛門が勘定奉行に昇任した。

上述の如く、主要な道路沿いには諸生派が次々と現れ、藩邸を打ち払う勢いである。政府に残る鈴木縫殿、岡部忠蔵、原田誠之介等天狗党や天狗党から分かれた鎮派の士は決死の抵抗を見せるも、諸生派は破竹の勢いを増し、さらに藩主（慶篤：本稿筆者註）が賊の言い分を信ずるに至っては、無勢では所詮防ぎようがなく、ついに要路への諸生派の進撃を許すこととなった。目付組頭に昇格したばかりの小柳津と肥田は、この失態により外補に降格。

元治元年を主とする天狗諸生の乱を記録したものには『否塞録』のほかに、『石河明善日記』、『南梁年録』が知られています。前者は名のとおり、彰考館員・石河明善の日記であり、後者は、同館員・小宮山昌玄（号は南梁）の記録です。二人は共通して彰考館員であり、弘道館訓導（教員）でした。立場として、諸生派であろうし、無事に明治を迎えていますから、いわゆる鎮派であったのでしょう。なお、「彰考館」とは、江戸時代に水戸藩が『大日本史』を編纂するために置いた歴史書編纂所で彰考館関係の資料は、徳川ミュージアムに収めてあります。

さて、『否塞録』の著者ですが、残念なことに明らかでありません。上記の石川明善、南梁と同様な立場の人であろうとは推測しています。しかし、記録の中では諸生派を批判し、天狗党に同調しています。したがって、筆者は、この騒動の中枢には遠い位置にいて、しかも奸人（諸生）から情報を得られた老齢者ではないでしょうか。

冒頭に、「南容の言行はなけれども」と記しています。「南容」とは、中国春秋時代の魯の人で孔子の弟子です。姓は南宮、字は子容。言葉を慎む人柄を見込まれて、孔子の姪を妻とした人物を指すらしい。つまり、何事を見聞しようが表面上、学究を貫いているような態度でいたのでしょう。『否塞録』の中でも、人事異動など事実関係を主として、淡々

と記述しています。しかし、押さえきれない感情がところどころに出てきています。時に遭遇して、これらの感情を表に表さない努力は大変なものだったでしょう。

「否塞」は耳慣れない言葉ですが、意味は文字通り「閉じふさがること、閉塞」であり、「国家文運の遂に否塞せんことを」などという言い回しが辞書に載っています。本文中では、「嗚呼甲子の乱天地否塞して奸人志を得て正家退けらる」（上巻 1 ページ）、「国家の否塞此極に至る」（上巻 65 ページ）、「国事の否塞此極に至る」（上巻 90 ページ）、「天地否塞し大道湮晦する事殆ど五年」（下巻 257 ページ）のように使われています。